

CONTENTS

目录



日本中華總商會

2020

日本中華總商會 20 周年紀念專刊

主 办：一般社団法人日本中華總商會

策 划：日本中華總商會廣報委員會

发行人：严 浩

总策划：陈 熹、庄 旭

统 筹：朴文杰、佐佐木操

协 调：孔 怡、李太顺

主 编：杨文凯

执 行：孙 辉

编 辑：孙 辉、张 石、杜海玲

制 作：程 洁、宋 杨

设 计：宋 杨

校 对：尤锡川

日本中華總商會事務局

〒 150-0013

東京都渋谷区恵比寿 1-15-1

恵比寿パルクビル 2F

TEL: 03 - 5422 - 7926

FAX: 03 - 5422 - 7925

E-mail: info@cccj.jp

URL: http://www.cccj.jp

P05 各界賀詞

Congratulation

- P05 中國駐日本大使 孔銘佑
P06 日本經團聯會長 中西宏明
P07 經濟同友會代表干事 櫻田謙吾
P08 日本商工會議所會頭 三村明夫
P09 日中經濟協會 會長 宗岡正二
P10 日中國際貿易促進會會長 河野洋平
P11 中華全國工商業聯合會
P12 中國國務院僑務辦公室
P13 中華全國歸國華僑聯合會
P14 中國僑商聯合會會長 謝國民
P15 中國僑商聯合會會長 許榮茂
P16 新加坡中華總商會會長 黃山忠
P17 香港中華總商會會長 蔡冠深
P18 泰國中華總商會會長 林楚欽
P19 全日本華僑華人社團聯合會
P20 日本華僑華人聯合總會

P24 紀念致辭

Keynote

- P25 中國駐日大使 孔銘佑 賀詞
P26 日本中華總商會會長 嚴浩 致辭

P29 總商會概要

Introduction

- P30 日本中華總商會第五屆法定理事會
P31 任意團體時期的理事會名單
P32 成立社團法人後理事會構成
P34 日本中華總商會概要 中文版
P35 日本中華總商會概要 日文版
P36 日本中華總商會概要 英文版
P37 日本中華總商會組織結構
P38 日本中華總商會會員種類
P39 日本中華總商會團體會員

P40 事業活動

Branch

- P41 會員服務事業
P42 交流部會活動介紹
P43 視察研修部會活動介紹
P44 對外交流事業
P45 廣報宣傳活動
P46 公益活動 社會貢獻

P49 品牌活動

Brand

- P50 在日華人企業界聯合會
P51 日本中華總商會正式成立

目录

CONTENTS

第九届世界华商大会开幕	P52
日本华商组团出席世华会	P53
华商经济论坛打造交流舞台	P54
中华总商会中国考察纪要	P55
产业考察：学习交流合作	P56
夏令营：中国寻根之旅	P57
迎春会：与日本交流品牌	P58
赏月会：融合日中传统	P59
日本中华总商会成立 10 周年	P60
日本中华总商会成立 15 周年	P61
中日友好北高尔夫大会	P62

P63 总商会在行动

Project

面对新冠疫情 总商会在行动	P64
中华总商会捐赠物资显担当	P65
倾听新会员的心声和期待	P66

P69 华商回顾

Review

三者鼎谈：创汇 20 周年的回顾与展望	P70
朱 炎：日本华商 20 年及其新动向	P74
王效平：东盟华商的发展与日本	P78

P83 我与总商会

Memory

严 浩：交流、学习、成长	P84
刘正民：我与日本中华总商会	P86
吕克俭：祝贺总商会成立 20 周年	P87
潘若卫：栉风沐雨、春华秋实	P88
张宇蓝：我与日本中华总商会	P89
林 立：我与日本中华总商会	P90
船津康次：寄语总商会 20 周年	P91
仇福庚：往事回首二十载	P92
贺乃和：总商会 20 周年回顾	P93
刘炳义：我和日本中华总商会	P94
何玲青：我与日本中华总商会	P95
王裕晋：我与新 中华总商会	P96
沈高平：上海联谊会与总商会	P97
张书明：日本徽商协会与总商会	P98
冯海军：记总商会的黑龙江之旅	P99
石野长丈：藤田观光与中华总商会	P100

P103 图文纪事

Picture

P124 祝贺广告

Advertising

P131 总商会大事记

Event list

20 周年纪念特刊 祝贺广告一览

EPS ホールディングス株式会社	P02
交通银行东京分行	P21
益新集团	P28
DigitalVorn	P47
JCD 集团	P48
柏物産株式会社	P68
株式会社ビッグバンズ	P81
株式会社 InfoDeliver	P82
株式会社認証技術支援センター	P101
各地商会共同祝贺	P102
全日本华侨华人社团联合会	P125
株式会社ワントラスト	P125
源清田集团	P126
インタセクト・コミュニケーションズ 株式会社	P127
希亚思情报技术	P128
富士商城株式会社	P129
クロスサポート株式会社	P130
ワンタフルフライ株式会社	P130
藤田観光株式会社	P149



紀念致辭



中国驻日大使孔铨佑

致日本中华总商会 20 周年特刊贺辞



值此日本中华总商会成立 20 周年纪念特刊出版之际，谨致以热烈祝贺！

日本中华总商会自 1999 年成立以来，秉持办会宗旨，团结合作，积极进取，不断发展壮大，为促进在日华侨华人及华商企业发展，深化中日务实合作，增进同世界各国华人团体交流发挥了积极作用。今年新冠肺炎疫情肆虐期间，贵会不忘初心，为支持祖国抗疫、促进中日合作作出了积极贡献，得到各界高度肯定。

2020 年，祖国将决胜脱贫攻坚，全面建成小康社会，实现第一个百年奋斗目标，乘势而上开启全面建设社会主义现代化国家新征程。中日关系保持改善发展势头，两国领导人就构建契合新时代要求的中日关系达成重要共识，双方各领域交流合作也正迎来进一步发展的历史性机遇。

新形势下，衷心期待贵会继续勇立潮头，发挥桥梁纽带作用，广泛团结旅日侨胞，汇聚侨心侨力，凝聚侨智侨资，为支持祖国和家乡发展，促进中日务实合作，增进两国人民友好感情作出更大贡献！

中华人民共和国驻日本国特命全权大使

孔铨佑

二〇二〇年七月

日本中华总商会会长 致辞



日本中华总商会会长 严浩

中日两国邦交正常化特别是中国改革开放以后，一批又一批的青年负笈东瀛，前往日本留学、工作、追梦。随着中日经济关系的深度交织和中国经济的高速发展，被喻为新华侨的他们当中很多人抓住机遇，发挥双方在技术、市场、劳力、成本等方面的优势成功创业，在日本社会中生根发芽，逐步成为中日两国经济交流中的生力军。

商务的发展必然催生出交流和网络的需求。在老华侨企业和中资企业的积极参与下，1999年9月9日以新华侨华人经营的企业为主体、包括一般日本企业作为赞助会员的日本中华总商会应运而生。在中国改革开放的时代大潮流中，在中日经济关系深度交融的大环境下，承蒙中日两国各有关方面的大力支持和关心，承蒙广大会员的积极参与、勇敢实践和不断奉献，总商会已经走过了20个不平凡的春秋。在此，我谨代表日本中华总商会理事会，向全体会员表示真诚的祝贺，向所有支持和关心我们的朋友表示衷心的感谢。

饮水思源，在庆祝总商会成立20周年之际，我们尤其感激和怀念筹备和创始初期为总商会沥尽心血的前辈们，没有他们的奉献就没有总商会的今天；同时，我们也真挚地感谢广大会员们的积极参与和奉献，正因此我们的事业和影响才得以不断壮大和提升。

回顾过去的历程，日本中华总商会的发展始终离不开三个关键词：即“商”、“中华”、“日本”。

首先，既然是商会，自然要“以商为轴”，在商言商，以为在日华商服务为使命，打造开放包容的中日经济交流合作的平台。

其次，总商会有必要依托和发挥“中华”的优势和资源，倡导与祖（籍）国多互动，同时不断增进与全球华侨华人团体和企业的沟通，打造包括在日华商、相关日本企业与中国、与全球华侨华人交流合作的平台。

其三，总商会是由扎根于“日本”社会的会员企业组成，与日本社会、尤其是日本经济界的交流对会员企业的发展、对努力打造中日经济交流新平台的总商会来说尤为重要。为此，主动与以经济团体为代表的日本各界交流和互动，打造会员积极参与的与日本经济界、与日本社会交流合作的平台。

总商会的20年，是总商会全体会员对这三个关键词不断深化理解、不断实践努力的20年。截至3月，总商会已拥有近400家会员，基本涵盖了具有代表性的在日华侨华人经营企业；近20家由中国各省市在日商界人士组成的各地商会作为团体会员的加盟，使得总商会的开放性和代表性得到进一步的体现，不仅可以资源共享，同时也促进了在日华商团体的整体发展；约100家日本企业作为赞助会员的加入，对总商会促进中日经济交流、融入日本主流社会起到了重要作用；经过不断的摸索和创新，总商会逐步形成了行之有效的组织和运营机制；以关西中华总商会和新泻中华总商会为代表的直属分会的活动也日趋活跃。

在各方面的热情支持和帮助下，总商会的社会作用日趋明显，社团功能不断完善，社会地位已得到海内外各界的广泛认同，可以说日本中华总商会已成为最具代表性和权威性的在日华侨华人经济团体。

去年9月总商会迎来了成立20周年这一继往开来的重要节点。古人云：二十不悔，三十而立。总商会20年的经历证明我们没有悔于时代，没有悔于大好年华。

放眼未来，无论外部环境怎样变化，总商会要始终坚持为在日华商服务，以构建会员与各方面的交流平台为己任的这一基本出发点，不偏离“商 中华 日本”这三个轴心，更加广泛地团结在日华商，发挥自身优势，努力为华商事业的发展和中日经贸关系的深化不断作出新的贡献。

2020年3月吉日

日本中華總商会会長挨拶

日中国交正常化以降、特に中国の改革開放後に大勢の若者が海を越え中国から日本に渡り、勉学や仕事に夢を求め奮闘してきました。中国経済の高度成長に伴い、日中経済関係が深く交じり合うにつれ、新華僑と言われる彼らの中の多くが機会を掴んで創業し、日中両国間の技術、マーケット、労働力、そしてコストなどそれぞれの優位性をうまく発揮して、日本社会に根を下ろし、徐々に日中両国の経済交流に無視できない存在となりました。

ビジネスには交流とネットワークが付き物です。老華僑の有志や中国企業の在日法人などの積極的参画を得て、1999年9月9日に新華僑が経営する企業を主体とし、一般日本企業も賛助会員として含める日本中華總商会が誕生しました。中国改革開放の時代潮流の中、日中経済が深く絡み合う環境において、日中両国各方面のご支援とご協力のお蔭様で、また会員皆様の積極的な参画と果敢な実践により、總商会在日華僑華人の最も代表的な経済団体に成長して参りました。ここで私は日本中華總商会理事会を代表して、会員の皆様にお祝いを申し上げますと共に、ご支援とご協力を頂きました全ての皆様に心より感謝を致します。

中国に「飲水思源」（水を飲んで源を思う）という諺があります。總商会設立20周年に当たり、私たちは会の準備と発足に心血を注ぎ尽くした先輩の方々に改めて敬意を捧げたいと思います。また会の活動に積極的に参画そして貢献して来ました会員の皆さんにも感謝を申し上げます。

過去を振り返り、日本中華總商会の発展は、「商」、「中華」、そして「日本」の三つのキーワードをぬきにしては語れません。

先ず、總商会の基軸が「商」、即ちビジネスにあります。会員へのサービス提供を宗旨とし、会員交流のプラットフォームの構築を使命とすることです。

次に、「中華」というリソースを生かすこと。ビジネスを念頭に中国と連携して、日本と中国の経済貿易等領域における協力を推進し、また世界の華僑華人団体や企業との交流を増進することによって、会員のビジネス活動を支援します。

更に、總商会は日本社会に根ざす会員企業によって構成されるため、日本社会殊に日本経済界との交流が会員企業の発展、そして日中経済交流の新しいプラットフォームの構築に極めて重要です。長年努力のお蔭で、總商会が日本商工会議所、経団連、経済同友会など日本の経済団体と良好な関係を持つようになり、定期的な交流活動を行っています。

總商会は今約400社の企業会員を擁し、在日華僑華人が経営する代表的な企業をほぼカバーしています。また、中国の各地域出身の在日経営者が組織する地域団体約20団体が加盟していることから、總商会の代表性をより高めています。加えて、約100社の有力な日本企業が参加され、日中経済交流の促進と總商会の日本社会への融け込みに大きな役割を果たしています。さらに、関西中華總商会や新潟中華總商会に代表される直属分会の活動も益々盛んになってきています。

各方面からの強いご支持・ご支援のお蔭様で、總商会の役割は日々顕著になり、団体としての機能も向上し、社会的地位も各界から広く注目されるようになりました。

古人いわく。二十不悔。三十而立。この20年の足跡を顧みれば、我が時代に悔いなしと言えましょう。

今後外部環境が激しく変化することは言うまでもありませんが、總商会としては華商へのサービス提供を堅持し、会員および各方面との交流プラットフォームの構築を使命とする初心を忘れず、「商」「中華」「日本」の三つの軸から逸れず、より多くの在日華商を団結して、自らの強みを発揮し、華商事業の発展と日中経済貿易関係の深化に新たな貢献をして参りたいと思います。

引き続きのご支援ご指導を心よりお願い申し上げます。

2020年3月吉日

总商会概要



日本中华总商会第五届法定理事会



代表理事：严浩



代表理事：萧敬如



理事：陈熹



理事：徐志敏



理事：潘若卫



理事：尚捷



理事：张宇蓝



理事：庄旭



理事：林立



理事：船津康次



监事：仇福庚

日本中华总商会历任会长



第一任
吕行雄(已故)
(1999.9-2001.12)



第二任
严浩
(2001.12-2003.3)



第三任
颜安
(2003.4-2006.2)



第四任
黄耀庭
(2006.3-2008.3)



第五任
李坚
(2008.4-2009.3)



第六任
严浩
(2009.4-至今)

日本中华总商会概要

一般社団法人日本中华总商会是以在日华侨华人经营的企业为主体的经济团体，以 80 年代以后来日留学的所谓新华侨创业的企业为主，在老华侨和中资企业的积极参与下，于 1999 年 9 月 9 日在东京成立。

经过 20 年的发展，总商会现拥有近 400 家会员，基本涵盖了具有代表性的在日华侨华人经营企业；近 20 家由中国各省市在日商界人士组成的各地商会作为团体会员的加盟，使得总商会的开放性和代表性得到进一步的体现；约 100 家日本企业作为赞助会员的加入，对总商会促进中日经济交流、融入日本主流社会起到了重要作用；经过不断的摸索和创新，总商会逐步形成了行之有效的组织和运营机制；以关西中华总商会和新泻中华总商会为代表的直属分会的活动也日趋活跃。



■日本中华总商会的基轴

回顾过去的历程，日本中华总商会的发展，始终离不开三个关键词：即“商”、“中华”、“日本”。

首先，既然是商会，自然要“以商为轴”，在商言商，以为众多华商服务为使命，以构建会员交流平台为己任。

其次，总商会必须依托“中华”优势和资源，倡导与祖（籍）国多互动，促进中日两国在经贸等领域的深度合作，同时不断增进与全球华侨华人团体和企业的沟通，以帮助会员构建更广泛的商业网络。

其三，总商会肇建伊始便倡导在日华侨华人要摒弃“客居意识”，与日本各界人士广泛深入地交流，努力扎根日本，融入主流社会；要遵守日本的法律法规以及道德规范，不断提升企业的治理水平。

■总商会的特征

(1) 会员大都拥有留学经验，更加擅长于应用 IT、生物等新技术和创新的新经济。

(2) 总商会的会员除了在华商外，还广泛接受一般日本企业作为赞助会员加入。由此汇集了多彩的人才，拥有联接中日经济界的多种渠道，具有多视角的考察能力，成为中日经济交流中能够真正相互理解和信任的桥梁。

(3) 总商会于 2007 年在神户成功主办了第九届世界华商大会，成为这个世界各地华商以拓展全球经济网络，促进华侨华人经济的发展，并惠及主办国经济为目的共聚一堂的世界华商盛会的日本窗口单位，契此与东南亚为首的各国华侨经济团体建立了广泛的联系，成为日本与海外华侨界经济交流的桥梁。

■总商会的組織

在会员大会（总会）下设有理事会、执行理事会，全面负责会的运营与管理。执行理事会下设有四个专门委员会，负责各种事业活动的规划和实施。除了位于东京的本部外，在关西和新泻设有地方分会。事務局作为常设机构不仅负责会运营等日常工作，还担负着对外联络的窗口功能。

■主要团体会员

日本浙江总商会 日本福建经济文化促进会 日本吉林总商会 日本天津总商会 日本徽商协会 日本北京总商会 日本黑龙江总商会 日本河南总商会 日本川渝总商会 日本江西总商会 日本江苏总商会 日本上海总商会 日本宁波商会 日本深圳经贸文化促进会 吉林大学日本商工联合会 北京联谊会 上海联谊会

■联系我们：日本中华总商会事務局

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿 1-15-1 恵比寿パルクビル 2F

电话：03 - 5422 - 7926 FAX：03 - 5422 - 7925 Email：info@cccj.jp URL：http://www.cccj.jp/

日本中華總商会の概要

一般社団法人日本中華總商会は在日華僑華人が経営する企業が主体となる経済団体であり、1999年9月9日、老華僑の有志や中国企業の在日法人などの積極的参画を得て、80年代以降留学などのために来日したいわゆる新華僑が創業した企業を中心となって東京で設立されました。

20年の発展を経て、總商会は今約400社の企業会員を擁し、在日華僑華人が経営する代表的な企業をほぼカバーしています。また、中国各地域出身の在日経営者が組織する地域団体約20団体が加盟していることから、總商会の代表性をより高めています。加えて、約100社の有力な日本企業が参加され、日中経済交流の促進と總商会の日本社会への融け込みに大きな役割を果たしています。さらに、関西中華總商会や新潟中華總商会に代表される直屬分会の活動も益々盛んになってきています。



■日本中華總商会の基軸

日本中華總商会はその名前の通り、「日本」と「中華」を「商（ビジネス）」で総べることです。即ち總商会の基軸は「ビジネス」にあり、華商へのサービス提供を自らの使命とし、日中経済交流のプラットフォームの構築をミッションとしています。そのためにも、「中華」という資源を積極的に生かすだけでなく、「日本」の社会に深く根をおろさなければならぬことを設立当初から唱え、実践して参りました。

■總商会の特徴

- (1) 新華僑が留学の経験を持つ者が多く、ITやバイオテクノロジーに代表される新しい技術を駆使するニューエコノミーに長けております。
- (2) 設立当初より一般日本企業も賛助会員として受け入れてきました。その結果、中国と関わりの深い日本企業やグローバルにビジネスを展開する日本企業が数多集まり、日中経済交流において多様なチャンネルや複眼的な視野にて行うことが可能となっています。
- (3) 總商会は2007年に神戸で第九回世界華商大会を主催したことから、世界各地の華商がグローバルにネットワークを構築し経済活動を促進するこの大会の日本での窓口となり、これを契機にして東南アジアをはじめとする世界か国の華僑経済団体と交流と連携の関係をもち、日本と世界華僑界との橋渡しの役割を果たしてきました。

■總商会の組織

会員總會の下に理事会、執行理事会を設置し、会の運営管理を行っています。その下に四つの専門委員会を設けて、各種事業活動における方針策定と実施指導を担当します。東京に本部の外に、関西および新潟に地方分会を設置しています。また、常設機関としての事務局が会の日常運営を行い、対外連絡などの窓口機能も担っています。

■主な団体会員

日本浙江總商会 日本福建經濟文化促進会 日本吉林總商会 日本天津總商会 日本徽商協会 日本北京總商会 日本黒竜江總商会 日本河南總商会 日本川渝總商会 日本江西總商会 日本江蘇總商会 日本上海總商会 日本寧波商会 日本深圳經貿文化促進会 吉林大学日本商工連合会 北京聯誼会 上海聯誼会

■連絡先：日本中華總商会事務局

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿 1-15-1 恵比寿パルクビル 2F
電話：03 - 5422 - 7926 FAX：03 - 5422 - 7925 Email：info@cccj.jp URL：http://www.cccj.jp/

About the Chinese Chamber of Commerce in Japan

Chinese Chamber of Commerce in Japan is an economic association consisting mainly of corporations run by overseas Chinese in Japan, established in Tokyo on September 9, 1999. Corporations founded by the so-called new overseas Chinese played the central role, with active participation from volunteers of older overseas Chinese and overseas branches of Chinese companies in Japan.

After 20 years of progress, today the CCCJ has around 400 corporate members, almost completely covering all major companies run by overseas Chinese in Japan. Furthermore, the participation of around 20 local associations organized by corporate owners from respective regions of China is enhancing the level of representation. In addition, around 100 major corporations of Japan has participated, serving a major function in fostering Japan-Chinese economic exchange and integration into Japanese society. Moreover, we are seeing increasingly lively activities of branch associations, notably the Chinese Chamber of Commerce in Kansai and Chinese Chamber of Commerce in Niigata.

■ The core of CCCJ

CCCJ is, as its name suggests, committed to arch over "Japan" and "China" through "Commerce". That is, the core of CCCJ lies in the "business", defining its objective as the provision of services to overseas Chinese, undertaking its mission as the formation of platform for Japan-Chinese economic interchange. For this end, we have not only actively utilized the advantage of our being "Chinese" but also advocated for the importance of taking root deep within "Japanese" society from the very beginning, and have done so.

■ The characteristics of CCCJ

(1) With many new overseas Chinese having studied abroad, we have advantage on the new economy that utilizes new technologies notably IT and bio technology.

(2) We have accepted ordinary Japanese corporations as supporting members from the beginning. As a result we have attained the participation of many Japanese enterprises with strong relationship with China and those operating business globally, enabling our Japan-Chinese economic interchange to be on various channels with broader perspective.

(3) CCCJ has hosted the 9th World Chinese Entrepreneurs Convention in 2007 at the city of Kobe. In this convention where Chinese entrepreneurs from all over the world engage in global networking we have functioned as the point of contact in Japan. This opportunity allowed us to hold relationships of interchange and collaboration with overseas Chinese economic groups of various countries in the world, in particular the South East Asia, playing the role of the bridge between Japan and the world's overseas Chinese community.

■ CCCJ Organization

We have the Board of Directors and the Board of Executive Directors under the General Council to operate and manage the organization. We have set up 4 specialized committee that are in charge of policy formulation and practical guidance. Other than the Head Office in Tokyo, we have regional branch associations in Kansai and Niigata. Furthermore, the Secretariat as permanent organization is in charge of day-to-day operation of CCCJ, taking on the role of contact handling like external contact.

■ Major member associations

Zhejiang Chamber of Commerce in Japan; Fujian Economy and Culture Promotion Association in Japan; Jilin Chamber of Commerce in Japan; Tianjin Chamber of Commerce in Japan; General Corporation-Association of HuiShang in Japan; Beijing Chamber of Commerce in Japan; Heilongjiang Chamber of Commerce in Japan; Henan Chamber of Commerce in Japan; Sichuan Chongoing Chamber of Commerce in Japan; Jiangxi Chamber of Commerce in Japan; Jiangsu Chamber of Commerce in Japan; Shanghai Chamber of Commerce in Japan; Ningbo Chamber of Commerce in Japan; Japan-Shenzhen Economic and Cultural Promotion Association; Jilin University Japan Business Club; CCCJ Beijing Society; CCCJ Shanghai Society

■ Contact: Secretariat of CCCJ

〒150-0013 1-chōme-15-1 Ebisu Shibuya City, Tōkyō-to Ebisu Park Bldg. 2F

Phone : 03-5422-7926 FAX : 03-5422-7925 Email : info@cccj.jp URL : <http://www.cccj.jp/>

总商会的组织结构

经过多年的摸索，总商会已经形成了一套比较成熟的运营管理机制，在理事会、执行理事会下设置有运营、涉外、广报和总务四个委员会，负责各种事业活动的规划和实施，以及会的运营与管理工作。总商会的本部设于东京，在关西和新潟设有地方分会，即关西中华总商会和新潟中华总商会。事务局作为常设机构不仅负责全会的运营等日常工作，还承担着对外联络的窗口功能。

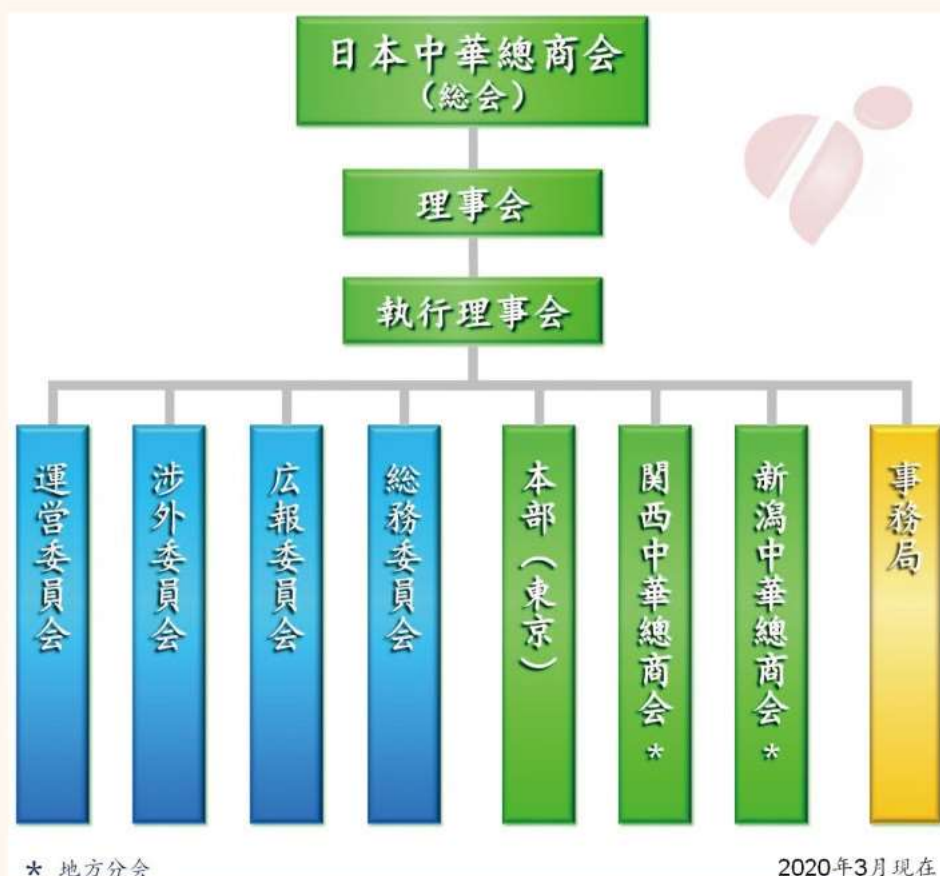
运营委员会：负责本会会员发展和持续地开展交流及提供服务所需要的机制建设和相关活动的策划与实施。运委会下设有如“会员交流”“讲座和视察研修”等部会，积极组织和开展面向会员的各项活动。

涉外委员会：负责本会与中国、海外华侨以及日本经济界开展交流所需要的机制建设和相关活动的策划与实施。

尤其是本会作为在日华商团体的代表加盟世界华商大会顾问委员会，维系与各国中华总商会等华侨团体的关系也是涉外委员会的重要功能之一。

广报委员会：负责本会对外宣传所需要的机制建设和相关活动的策划与实施。利用宣传册、网站、会刊等手段推介总商会，报道各种新闻和活动，为外界更好地理解总商会服务，也为募集新会员提供必要信息。

总务委员会：负责本会财务会计总务等日常运营管理所需要的机制建设和具体实施。包括维系作为常设机构的事务局的日常运营，确保为会员服务的据点和对外联络的窗口。



总商会的会员种类

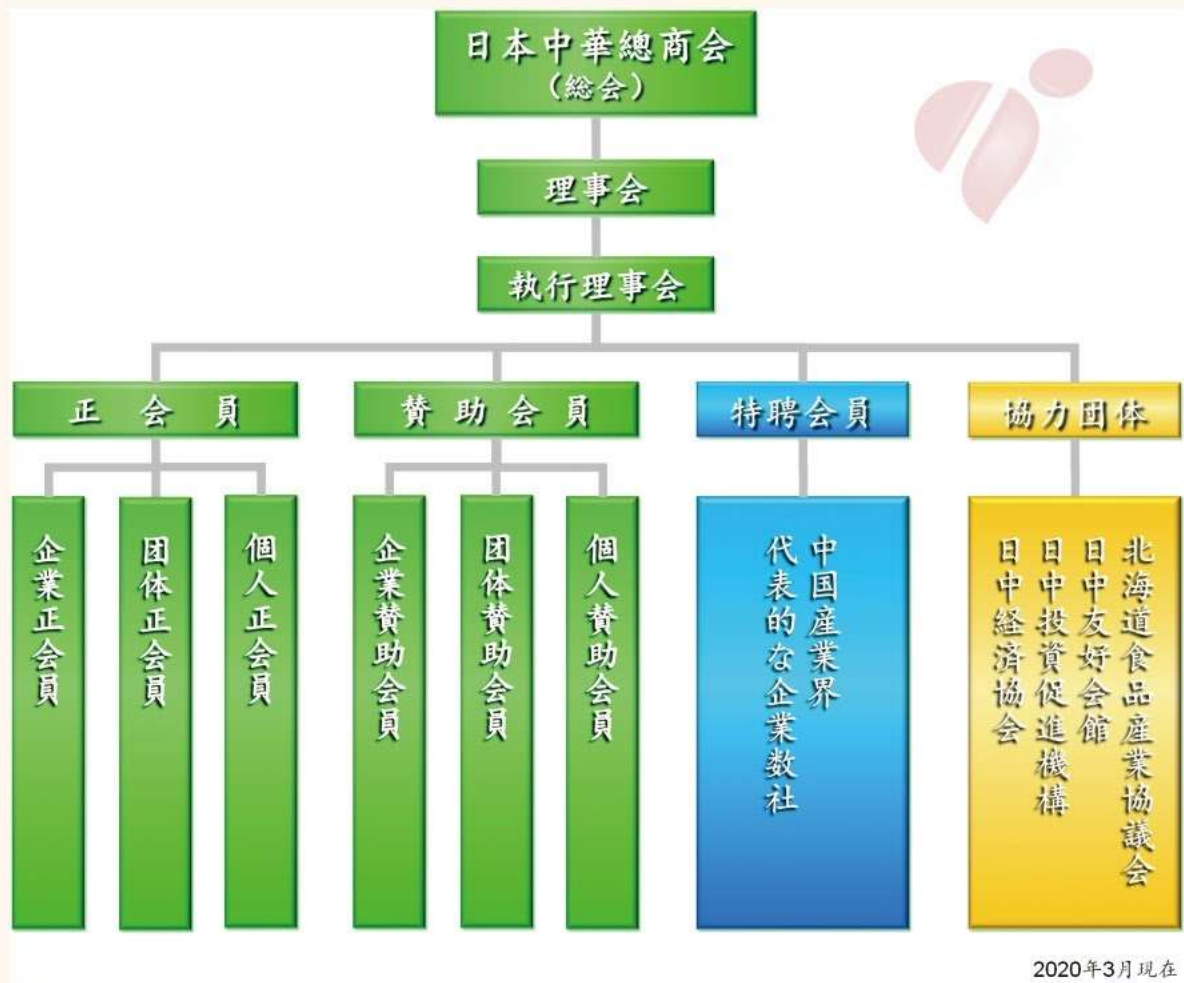
2012年社团法人化后，随着总商会的集团化发展和各方面代表性的提升，总商会会员种类也日趋多样化。根据2019年修改的总商会章程，现在的会员可分为以下四大种类：

正会员：包括在日华侨华人经营的在日注册的企业法人的企业正会员、各地商会等各种在日华侨华人经济团体的团体正会员、和从事经济活动或拥有特殊技能的在日华侨华人的个人正会员。

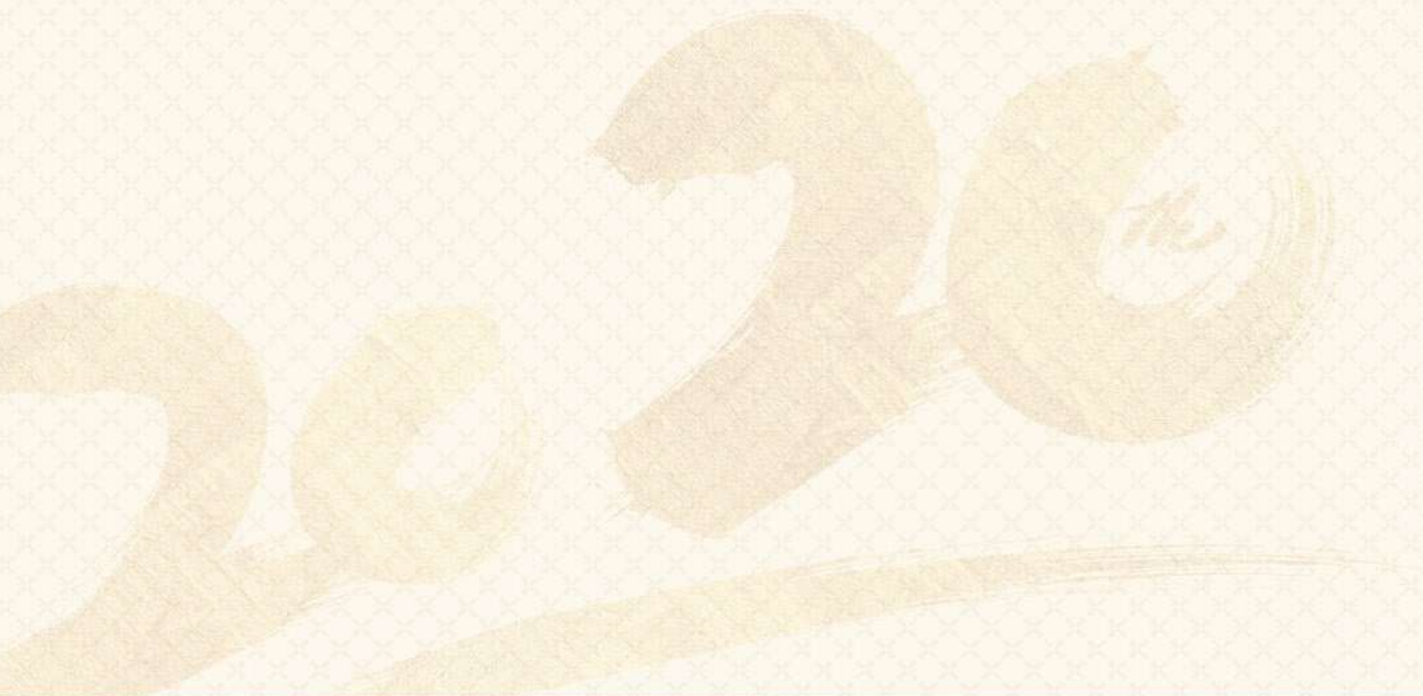
赞助会员：包括以赞助形式加入本会的日本企业的企业赞助会员、日本经济团体等的团体赞助会员和以个人身份赞助本会的个人赞助会员。

特聘会员：赞同本会宗旨、有意与本会提携合作的、在中国产业界具有代表性的企业和经济关连团体。

合作团体：与本会持有相同目的、有意相互支援的日本经济团体。



事业活动



会员服务事业

会员服务是总商会最基本和最重要的事业活动。其目的在于帮助会员企业提高经营管理和治理水平，扩大商业人脉和商机，促进会员之间的交流与合作。

2012年4月，总商会正式登记成为一般社团法人，从任意团体改制为根据法律运作，拥有法人资质的社会团体。总商会的运营和管理机制也在摸索和创新中逐步走向正轨。从2014年起，总商会开始吸收由中国各省市出身的在日华商组成的各地商会作为团体会员加入进来，不断地扩大了总商会的在日华商代表性。

为了进一步提升影响力，更好地服务会员，由运营委员会企划和指导，总商会正在倾力开展以下为会员服务事业活动。

(1) 例会



以会员之间的交流为目的、以午餐会的形式举办的会员交流活动，参会者一边就餐一边听取会员演讲，包括企业介绍，并参与讨论，交换名片，相互沟通，借以为会员提供拓展人脉和商机的机会。自2018年举办以来尤其是新会员反映热烈，已成为总商会的一大品牌活动。

(2) 企业视察



以开拓会员视野，与日本各行成功企业直接交流为目的而举办的企业视察活动。通过对市场定位、生产效率、商业模式的解剖和分析，分享成功经验，以起他山之石的作用。自2015年举办以来，组织视察参观了包括日本航空、丰田汽车、Google、SECOM在内的许多著名日本企业和跨国公司，也有如海尔、大疆等的中资企业，还与本会的会员企业进行了互动。

(3) 讲座

以把握瞬变的商务环境和时代潮流，帮助会员增长知识、提升认识、顺应变化、捕获商机为目的，从外部聘请专家就敏感和时尚的话题进行讲演和讨论。自2016年开办以来，就AI、电子结算等技术潮流对商务的影响，对人民币国际化、达沃斯论坛等时事话题进行了学习和探讨，受到会员的一致好评。

(4) 赏月会

“每逢佳节倍思亲”，为了给会员提供联络情感，相互交流的机会，2016年创办的中秋佳节赏月会，逐步发展成为既有美食佳肴，又有热情表演，兼顾中国故乡情结和日本现地风采，还穿插着义卖等慈善活动的一大盛会。很多会员还利用这一机会邀请招待客户等事业关系，为增进理解和公关服务。

(5) 其他会员联欢活动



每年一度的中日友好杯高尔夫球赛已经持续了10年，年末“接地气”的忘年会每每盛况空前，以致场地难求。如会员总会等活动后的联欢会等，总商会利用各种机会组织各样的以会员亲睦交流为目的的联欢活动，为会员之间的交流、拓展人脉提供机会。

对外交流事业

总商会坚持“商”“中华”“日本”的基本定位，以商为轴，以为在日华商服务为使命，打造开放包容的中日经济交流合作的平台为己任，在涉外委员会的企划和指导下，致力于与中国、海外华侨以及日本经济界的交流事业活动。



(1) 与中国的交流

总商会自 2009 年以来，每年都会组织考察团回中国考察，积极与包括中央政府、地方政府、全国工商联以及企业进行广泛的交流，让我们的会员亲身感受祖国的发展和变化，为会员事业的发展提供机会。近年来以与各地商会共同组团的形式选定中国某一省市重点考察，与当地党政商企等相关部门深层次交流，了解该地的发展局势与需求，为会员拓展商机提供契机。



(2) 与世界各地华商的交流

总商会自 1999 年成立以来组团参加了历届的世界华

商大会，代表在日华商及一般日本企业积极与海外华人界沟通和交流。尤其是通过 2007 年在日本神户成功地主办第九届世界华商大会，得到了海外华人界的广泛认可，成为世界华商大会的日本窗口单位。至今我们已经与香港、泰国、新加坡、马来西亚等国的中华总商会建立了定期的交流渠道，互动合作，取得了丰硕成果。



(3) 与日本经济界的交流

总商会是由扎根于日本社会的会员企业组成，与日本社会、尤其是日本经济界的交流对会员企业的发展、对努力打造中日经济交流新平台的总商会来说尤为重要。经过 20 年的努力，总商会与包括日本商工会议所、经团连、经济同友会等日本经济团体建立了良好的沟通渠道，开展定期交流，取得了一定的成果。总商会还通过新年“迎春会”“华商经济论坛”等活动与日本经济界沟通和互动，也为会员拓展商机提供机会。

广报宣传活动

在广报委员会企划和指导下，通过对外宣介总商会，促进在日华商和日本社会对总商会的理解。同时面向会员

为扩大会员服务。

(1) 对外宣介总商会

为了增强外界、相关方面对总商会的了解，通过会刊、网站、宣传册宣传介绍总商会，包括提供各种事业活动、中日交流往来、经济环境变迁、会员企业动态等信息，以及借助如华商经济论坛等总商会品牌活动，促进在日华商和日本社会对总商会的理解，扩大总商会的影响，同时也

(2) 向会员提供信息

随着近年来总商会的活动愈来愈丰富多彩，与中日相关方面的交流日益增多，对会员信息提供的要求愈发强烈。总商会通过电子杂志、微信等形式定期或不定期地为会员提供各种活动信息和参加邀请，强化与会员的关系，为会员事业的发展服务。



公益活动 社会贡献



日本中华总商会作为社团法人，积极组织和参与各种社会公益活动，包括参加和支援各种中日友好活动，通过这些公益活动履行自身的社会责任，也为华商融入当地社会作出了重要贡献。

(1) 支援各种中日友好活动

总商会作为在日华侨华人的经济团体，除了组织和参与各种经济活动外，还积极支援如中国节、点亮东京塔等中日友好活动，为提高在日华侨华人声誉和影响力作贡献。

(2) 重大灾难时为灾区提供支援

在重大灾难发生时，总商会总是挺身而出，为灾民送温暖，为灾区送真情。四川汶川地震时，总商会心系祖国灾区人民，开展大规模募捐，为灾区提供了1300万日元的救援资金。

东日本大地震时，总商会除了为受灾地区募捐、向当地社团捐赠物资外，还组织志愿厨师奔赴灾区，为受灾民众提供热餐。

新冠疫情发生后，总商会筹资集物，捐赠予中国和日本有关方面，支援抗疫活动。

(3) 慈善活动

总商会通过义卖等活动集资，向中国贫困地区捐赠医药书籍等，为祖国教育振兴和尽快脱贫贡献薄力。



華商回顧



三者鼎谈

创会 20 周年的回顾与展望



严浩



颜安



曾德深

座谈嘉宾：

严浩：日本中华总商会会长、EPS集团董事长

颜安：东京华助中心负责人、曾任日本中华总商会第三任会长、全日本华侨华人联合会会长

曾德深：横滨山手中华学园理事长、曾任横滨华侨总会会长、日本华侨华人联合总会会长

司会：

杨文凯：《中文导报》社长、总编辑

编者按：

在日本中华总商会走过创会 20 周年之际，三位创会亲历者汇聚在横滨中华街菜香新馆，举行了座谈。与会人士回顾了中华总商会成立 20 年走过的峥嵘岁月，共话高质量发展之路，展望更加美好的未来。

杨文凯：今年适逢日本中华总商会成立二十周年，总商会将举办一系列纪念活动。今天这个座谈会主题就是回顾总商会二十年来的历史，展望未来发展之路。首先，请各位谈谈当初创立日本中华总商会的契机和背景。

颜安：说起日本中华总商会的创立，我记得是在 1998 年的一天，时任交通银行东京分行行长刘正民委派袁迈峰来找我。我与刘正民、

罗怡文、顾德明各位社长见面，提起创立日本中华总商会的事情，当时我只认识“中文产业”的罗怡文社长。后来，我参加了在交通银行东京分行会议室的一次筹备会，大概由六、七人，这是我第一次参加筹备会。以后，每个月开一次会，每次都会增加几人，当时大家都认真，充满激情和期待。

刚才我坐电车来横滨，在空空的车厢里看着一个车站一个车站很

快地闪过，就像看到中华总商会走过的20年：有的画面定格了，有些人 and 事自然逝去了，唯一不变的就是“变化”本身。当时由不同的人、不同行业、不同背景、不同发展时期的华商组成的中华总商会，如今已经成为日本最有代表性的侨团，确实让人感慨万千。

曾德深：日本中华总商会是新老华侨携手创立的，最初是吕行雄联络我的，在此之前日本还没有一个连接新老华侨华人的组织。

由于历史原因，过去横浜的老华侨分为大陆系和台湾系。1986年横浜中华街关帝庙失火后需要重建，促成了两岸华侨华人在中华街携手。以此次事件为契机，吕行雄当时担任横浜华侨总会会长，成为德高望重的侨领。

过去，我们习惯把改革开放以前在日本居住的华侨称为“老华侨”，当时老华侨有一个全国组织叫“代表会议”。改革开放后，来日新华侨越来越多，我们就考虑能不能吸引一些新侨加入。当时还有一些矛盾，比如一些老侨不愿取得日本国籍的华人加入，也有意见不

接受新侨加入。

但是吕行雄和我都认识到新华侨知识层次高，他们与国内的联系比老华侨多。新华侨以知识分子群体为多，他们活跃在日本社会的方方面面，比如IT、文化、教育等领域，做出了让人刮目相看的成绩。从事经济工作的新华侨，了解日本市场也了解国内市场，他们在日本学成并有了经济基础之后，转而投资中国，成绩不俗，这是很明智的抉择。

无论何种意见，都不能无视新华侨越来越多、老华侨人数不再增加的现实。新华侨是留学后在日创业，与老华侨走的路不一样。我觉得大家一定要组织起来，一定要合作。

日本中华总商会的成立，与世界华商大会颇有渊源。1991年首届世界华商大会在新加坡召开，那时候横浜华侨就组团参加了大会，此后第二届、第三届大会，横浜华侨都会组团参会。1999年，以吕行雄为首的新老华侨为参加第五届世界华商大会作准备，同年日本中华总商会的成立工作也在紧张准备着，于是大家推举吕行雄为日本中华总

商会首任会长。当时吕会长自身经营事务繁忙，但仍然不计个人辛劳受任会长。

我个人经营餐饮，也参与侨团工作。在参与第九届世界华商大会过后，我与其他华侨业务往来有限，同时在横浜山手中华学校担任理事长，事务也很多，直接参与总商会的活动就少了。

严浩：我在1999年参与总商会的成立筹备工作。记得大概是5、6月份，刘正明行长、仇福庚律师、小袁等人来找我，在这以前我们并不认识。1999年我的公司已有一定规模，员工有三、四百人。他们知道这个情况后来找我，在一家小寿司店聊了起来。这是我参加总商会的第一个起点。

我在旅日新华侨里属于小群体。我1981年由国家公派来日本，来日本较早，和80年代后期大批来日本的新华侨不一样，与华侨华人圈交往很少。1991年创业，一直到1999年都没有与中国相关的业务，到2001年公司上市以后才在中国设立公司。

在新华侨里，我们这批人比较



特殊，融入日本社会最早，与日本社会没有隔阂，但与80年代后期来的新华侨缺少交集。最初，我参与日本中华总商会是被动的，是刘正明行长把我拉上这条大船，但是一旦参与进来我还是比较投入的。参与总商会以后，我与华侨华人社会交往的机会更多了，结识了很多各行各业的杰出人士。

曾德深：我补充一点，日本中华总商会的成立也带动了老华侨成立日本全国性的组织。原先老华侨团体是各地华侨总会参与的“代表会议”，没有全国性组织。同在1999年，日本华侨华人联合总会正式成立，陈焜旺担任首任会长。



杨文凯：申办和承办世界华商大会，是日本中华总商会成立以后的一件大事，请各位嘉宾围绕这个内容谈一谈。

严浩：1999年9月9日，日本中华总商会正式成立，首任会长是吕行雄。2001年12月，我接任第二任会长。中华总商会成立之前，我没有参加过世界华商大会，成立后我参加了1999年10月在澳洲墨尔本举行的第五届世界华商大会，这是第一次以日本中华总商会名义组团参加世界华商大会。

2001年9月，我们组团参加在南京举办的第六届世界华商大会，

举办了“东瀛之夜”活动，把各国主要华商都请过来，并第一次正式发布日本中华总商会申办世界华商大会。此后，我带团先后去新加坡、泰国、香港等地拜访当地华商组织，为申办世界华商大会路演。最初计划承办2005年第八届大会，以纪念阪神大地震10周年为契机，打算在神户举行。但申办时竞争激烈，在2003年吉隆坡第七届世界华商大会上，秘书处在同一时间宣布：韩国华商团体获得第八届大会主办权，日本中华总商会获得第九届大会主办权。

从2001年到2007年，从申办到举办华商大会，总商会经历了三

任会长，我、颜安会长和黄耀庭会长，这一过程也是总商会的“创业期”。一个组织创业的时候，难免会出现各种意见，但在举办世界华商大会这件事上，新老华侨、总商会骨干的确展现出顾大局识大体的精神。中华总商会也在这五年中发现了骨干，培养了队伍，形成了规模。

颜安：从申办到主办世界华商大会的这一过程，也是对总商会组织和会员的一个历练和检验过程。记得在南京世界华商大会期间，日本中华总商会代表团举办了“东瀛之夜”活动，成功邀请300多位

来自世界各国和地区以及中国各地商界人士，首次集体展示出在日华商的风貌。

在宣布第九届世界华商大会在神户举办时，我任总商会会长，在欣喜之余还有些不安，因为日本华侨历史上还从未举办过如此规模的活动。后来经友人介绍，我认识了博鳌亚洲论坛创始人蒋晓松先生，并应邀去海南考察。我觉得蒋先生对主办国际会议还是非常有经验的，我在总商会里推荐了蒋先生，最终由他担任第九届华商大会组委会执行委员长。

事实上，在筹备工作上蒋先生还是很有办法的，比如大会许多筹备工作采用投标制，多家广告策划公司给出了内容、方法、价格等，最终选择了一家公司，同时又汲取了其他公司好的方案。华商大会具体工作很多，总商会的骨干各司其职，比如严浩筹办分科论坛、罗怡文分管宣传策划、颜安负责开闭幕式、蒋晓松负责接待中日高层人士等，展现了团结一心、同舟共济的精神风貌。通过成功举办世界华商大会，日本中华总商会树立了形象，进一步确立了“在商言商”的办会主旨。

杨文凯：世界华商大会对总商会的成长意义非凡。大会结束以后，总商会进入常态化发展，在这方面有什么内容可以分享一下？

严浩：黄耀庭老先生退任会长以后，李坚担任一年会长，后来由我接任会长至今。一个会要有办会宗旨，没有宗旨的组织是涣散的，这一点我一直在强调，这就是颜安会长也谈到的“在商言商”。日本中华总商会还有“中华”和“日本”的特点。

我们的“商”面向谁？如何展开？“中华”是我们总商会独特的优势，同时我们也强调要融入“日本”，这一点也得到了日本主流社会的认同。总商会每年举办新年迎春会，日本外务省、经产省及主流经济团体都会派代表参会。日本汽

车协会是汽车制造企业的组织，食品协会是生产食品的行业组织，我们则是立足日本，以“中华”为特色的经济团体。

日本与东南亚国情不同，华侨华人的历史发展、营商环境也不同，我们要做好中日间的经济交流，只靠华侨华人企业的力量是不够的，我们也向日本企业开放，有序地吸收日本企业以赞助会员的身份加入总商会，这也是总商会与其他侨团显著不同的一个特点。当然，我们的关键词里还有“中华”，所以在组织框架设计上对日本企业会员会有一定限制的，章程上规定华商理事须占三分之二以上。

今年是总商会成立20周年，总商会的会务和组织机制已形成框架和雏形——办会宗旨更加明确，组织上力图有章可循，在会员服务、与祖国及海外华商的交流、与日本

经济界的交流、品牌建立等方面也已形成理念。

理念不仅是一个概念，还需要践行理念。比如，按照章程要召开一年一度的会员大会，但近期因新冠肺炎疫情影响，会员们又不便聚集，但我们可以书面开会，把拟好的决议以书面形式传达给会员。总商会组织和企业一样，需要有可持续发展的规章。

我们希望总商会不仅是一个有“积累和沉淀”的组织、让会员有“成就感”的组织，也希望是一个吸引年轻新鲜血液不断流入的组织。这次20周年庆典，就是承前启后，继往开来，要以此为契机加强组织建设，大力吸收年轻会员加盟，形成阶梯形的人才梯队。

曾德深：提起吸收新鲜血液，我对在日华商也有一些建言，希望华商在打好事业基础的同时，更多

地关心公益事业。比如华文教育问题，希望华商为华人下一代的教育问题做出贡献，他们也是华商的未来。

杨文凯：最后，希望各位每人说一句话，表达对日本中华总商会未来发展的期待。

颜安：衷心期待日本中华总商会能够诞生引领时代的商界领袖。

曾德深：首先，希望老侨的企业能够多加盟总商会；其次，期待总商会在日本经济界的影响力进一步提升。

严浩：再过20年，希望总商会会员是现在的四倍，达到两千家企业，不仅有数量，更要有规模。日本中华总商会将实现有序发展，与日本经济的融合程度更加紧密，与中国的交流更有效，为祖国做出更大贡献。



日本华商 20 年



□ 作者：朱炎
拓殖大学政经学部教授

1957 年生于中国上海市。复旦大学经济系、日本一桥大学研究生院毕业。1990 年到富士总合研究所做经济研究工作，1996 年转至富士通总研，任经济研究所主席研究员。2009 年任拓殖大学政经学部教授至今。

1999 年，日本中华总商会成立，至今已整整 20 年了。这 20 年中，作为日本中华总商会的母体，日本华商的力量不断发展壮大，而日本中华总商会的发展，制度化和规模化又促进、带动了在日华商的创业和发展。

本文主要从日本华人社会对日本华商的支持和提供的商机，日本华商的创业和发展概况，日本华商在经营方面的新动向等方面分析日本华商这 20 年来的发展和变化的情况。

1、华人人口增加促进华商创业

20 年来，在日本居住的中国人越来越多，华人创业的母体增加，在日本企业工作的华人和留学生增加也使华人创业的后备军增大，同时，也给华商带来的无限的商机。

据日本法务省的统计，在日本长期居住的中国籍人士在 20 年前的 1999 年为 29.4 万人，占外国人总数的 18.9%，2005 年突破 50 万人，17 年突破 70 万人。最新统计是 2019 年 6 月，人数增至 78.6 万人，占比为 27.8%（图 1）。中国人居住人数在 2007 年超过了韩国、朝鲜人，之后一直是最大的外国人群体。

在日本居住的中国人持有各种不同的在留资格，对在日创业、经营公司有不同的意愿和积极性，也有不同的便利条件。但在留资格的详细统计只能查到 2006 年后的数据。比较 2006 年末和 2019 年 6 月末的数据，可以看到在日华商发

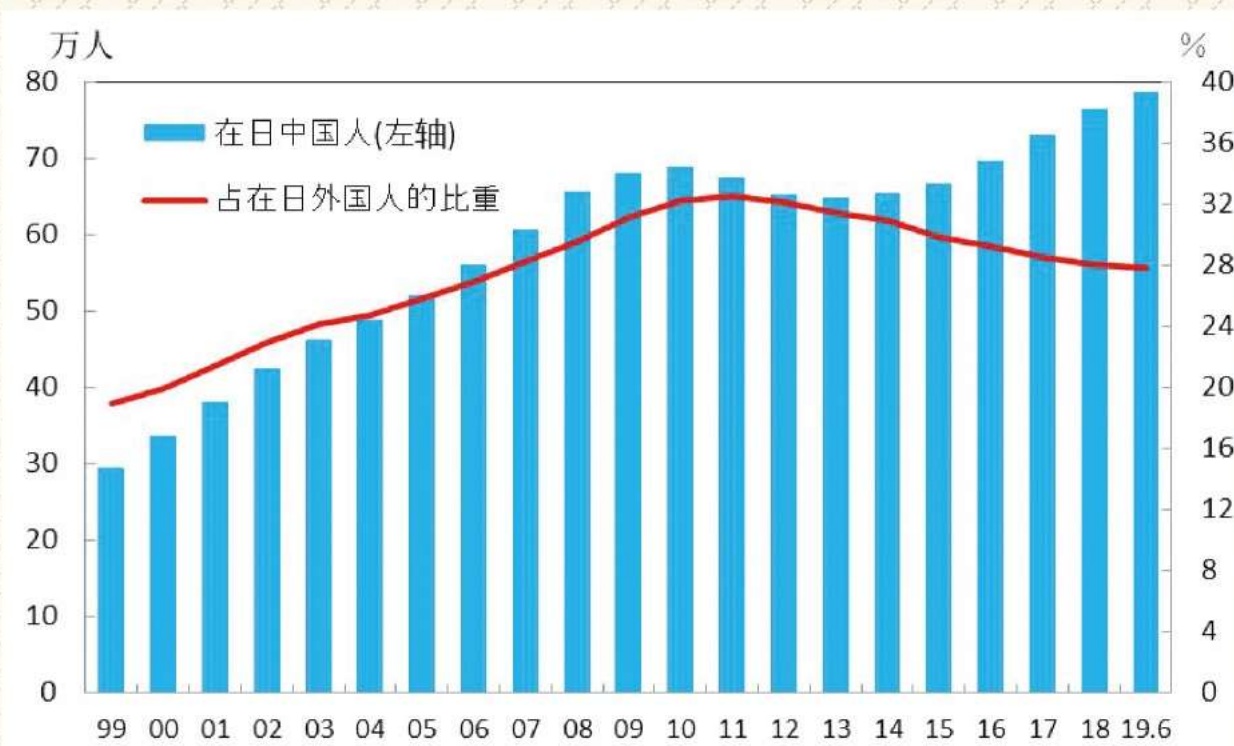
展的潜力。

在 2006 年末的 56.1 万人中，获得永久居住权（包括永住和定住两种资格）的为 15.4 万人，到 2019 年增加到 29.7 万人，占中国人总数的比重从 27.4% 增加到 37.8%。取得永久居住权的中国人有一定的社会地位，生活安定，有相对便利的创业条件。其次是在企业工作的人（包括技术、人文知识、国际业务、企业内转勤等签证类型）从 06 年的 4.4 万人增加到 19 年的 12 万人。在日本企业工作，学习了专业知识积累了人脉后独立创业的较多。还有就是留学生，从 06 年的 11 万人增加到 19 年的 13.3 万人。留学生毕业后很多到日本企业工作，也是华商的后备力量。特别值得瞩目的是持有“经营管理”这种签证资格，即在日本从事投资和企业经营的人，也就是华商，在 2006 年只有 1550 人，到 2019 年增加到 1.4 万人，虽然占在日中国人的比例不大，但在所有持有这种签证资格的外国人中中国人所占比重从 21.2% 增加到 52.2%（表 1）。

从在日华人居住地来看，主要集中在大都市及周 地区。2019 年在东京地区（包括东京都和千叶、埼玉、神奈川 3 县）居住的有 42.7 万人，占 54.3%，在关西地区（包括大阪、京都和神 ）有 10.5 万人，占 13.4%。

还有，在日华人的绝大部分是中国改革开放后来日本的所谓“新华侨”，而“老华侨”，即中国改革开放前就已在日本居住的中国人大约只有不到 3 万人，大部分是战前就在日本居住，在日本出生的

图1 在日中国人的人数变化



注：年末数，2019年为6月末。

资料来源：日本法务省在留外国人统计（登录外国人统计）。

表1 在日中国人的在留资格构成

		中国人 总人数	永久居 留者	经营 管理	在公司 就职者	留学生
2006年 末	人数(万人)	56.07	15.37	0.16	4.37	10.98
	占中国人总数的比重	100.0%	27.4%	0.3%	7.8%	19.6%
	占同类外国人的比重	26.9%	13.9%	21.2%	41.0%	65.1%
2019年 6月末	人数(万人)	78.62	29.71	1.36	11.97	13.28
	占中国人总数的比重	100.0%	37.8%	1.7%	15.2%	16.9%
	占同类外国人的比重	27.8%	22.9%	52.2%	36.5%	39.4%

资料来源：日本法务省在留外国人统计（登录外国人统计）。

中国人（仍持中国护照）。

上述的都是在日中国籍人士的情况，其实还有不少中国人更换了国籍，入籍日本。据日本法务省统计，截止2018年，共有14.5万中国人入籍日本。主要是近20年来更换的国籍。

中国游客大批赴日观光旅游也给日本华商带来了无限商机。据日本政府观光厅统计，中国人访日人数在2000年只有35万人次，到2019年达到959万人次，占访日外国人的比重超过30%。访日中国人中6至7成是短期的观光

客，那就是600~700万人的规模。这么多的游客带来很多需求，也促进了华商的创业，催生了相关服务业。

在日本的庞大的华人人口构成了日本的华人社会，对华商的创业和企业发展提供了很多有利的

条件。首先，华人有各方面的人材，如掌握高科技的科技人材，有熟知日本企业经营和商业运作的经营人材，还有众多的留学生，是创业的后备人材。其次，庞大的华人人口催生了为华人社会服务的各种产业。如上所述，在日长期居住的中国人已达 78 万人，已经加入日本国籍的日籍华人有十多万人，再加上台湾香港和东南亚的华人，中国人的日本人配偶及其家庭，华人人口已达百万之巨。还有每年多达近千万人次的中国人游客也提供了巨大的商机。再者，华人社会存在着各种相互关系，如同乡会、同学会、爱好会等，都可以成为华商交流信息，开展合作和共同事业的渠道。

2、日本华商的创业方式和主要行业

这 20 年的发展迅速，比较活跃的日本华商主要是改革开放后来日的所谓“新华侨”。分析华商创业的方式和行业，新老华侨有很大不同。

老华侨大部分是战前就在日本居住，或在日本出生的。所以，老华侨从事的事业有不少是从战前就开始了。老华侨涉猎最多的行业是餐饮业，即中华料理店。有些已经发展成高级中华料理的连锁店。日本的高级中国餐馆中大部分是老华侨的产业。其次是贸易，特别是与中国有关的贸易。在中国改革开放以前，大部分的中日贸易都由华商经营。特别是中国特产品的对日出口有不少交给华商企业独家经营至今。第三是为华人社会服务的行业，如旅行社和信用社等。

老华侨的企业一般规模都不大，而且比较集中在华人口多的东京、大阪等大城市和有唐人街的横浜、神 和长崎等地。

中国改革开放后，来日定居、学习、工作的中国人大量增加，华人创业也日渐活跃。这 20 年来华

人在日创业主要有以下的几种形式。

第一、做力所能及，门槛较低的产业，即从小本生意开始，由此积累资金和经验再向其他领域发展。不少有闲暇的中国人，在企业工作的人的家属，甚至从中国回到日本的残留孤儿也积极参与创业。选择餐饮业，即开中华料理店的比较多，中国人开的中华料理店遍及日本的城乡各地，主要为日本人消费者服务，近年来中国人也已成为主要客源。另外，由于日本的服务业普遍面临人手不足的情况，经营便利店的各大公司招聘加盟者，不少华人应聘成为便利店的店主，这是另一种形式的创业。

第二种情况是立足华人社会，为华人社会服务。比如中华料理的食材的进出口和零售，开中文书店办中文报纸，销售中文电话卡，做房地产中介等。近年来中国人赴日旅游大量增加，以中国游客为对象的旅行社，免税商店也开始大量增加。不过，这种从为华人社会服务起家的企业，发展起来后应将服务对象转向日本的主流社会，但这样的成功事例还不多。

第三、学以致用型创业，这是日本华人创业最多，也是最具代表性的形式。大量的留学生到日本留学，学成毕业后一般都选择到日本企业或研究机构工作。在工作中，对所从事的工作和所在的行业有了深入的了解，熟知其发展方向，掌握了技术并积累了经验和人脉。选择合适的时机成立自己的公司，继续在熟悉的行业从事熟悉的工作。还有的为推广应用自己在大学、研究机构、企业发明的技术而成立公司。当然，也有在大学学习期间就自己办公司的。

第四、应用有关中国的知识、人

脉开展事业。充分利用中国人对中国市场的理解，在中国的人脉和关系，以及在日本各方面的关系，发挥中日企业之间的中介、桥梁的作用。比如，贸易公司、投资公司、咨询公司、顾问公司等都起到了这种功能，还有不少华商企业与日本企业共同在中国国内开展合作。

日本华商的事业涉及各行各业，华商较为集中，形成了一定的规模的主要有餐饮、贸易、制造、金融、信息（IT）等行业。其中，IT 行业是日本华商最为集中的领域，在下文中详细介绍。

3、一枝独秀的 IT 业

日本的华人商界的特点之一，就是高科技行业特别是 IT 行业所占的比重较大，与其他国家华商的事业集中于商贸和生活服务的情况大为不同。IT 行业是日本华商最为集中的领域，涵盖软件开发、系统开发和外包、信息处理以及硬件的生产研发等多个领域。日本华商经营 IT 行业的特点一是企业数量多规模大，二是技术水平高，三是与中国国内的联系多。说 IT 行业支撑着整个日本华人商界亦不为过。

日本的华人 IT 企业大部分是软件公司，这类公司入门槛不高，所需要的资金相对较少，起步时的技术要求也相对较低。而在通信和硬件制造业领域，华人企业就较少涉及，因为新创业的华人企业并不具备充足的资金和足够的人脉以及业绩的积累，但也有从事硬件研发生产的华人上市公司。

大部分的华人 IT 企业的创业者，一般是在日本留学，学习了计算机科学、电子工学、数学等与 IT 有关的专业知识，获得了硕士、博士学位，有的甚至有自己的专利。在校期间就开始创业或毕业后马上创业的也有，但大多是到日本企业就职，在企业工作发挥所学之

长，也熟悉了业务，开拓了人脉关系，更掌握了行业的上下游关联和相关的客户。在日本企业工作几年后，在发现成长空间受限，继续留在企业已经无法施展自己的才学时，就果断地辞职下海，独自创立自己的公司，或与志同道合者共同开创自己的事业。很多华人IT公司的创业都有这样的过程。创业者有专业知识，有在日本企业工作的经历，熟知行业的运作，在业内有人脉有客户，还有一起创业的志同道合者，这就是华人IT企业的优势。

华人创业是日本IT企业的主要形式，还有一部分的企业是中国国内的IT企业在日本开拓的事业，或出资参股的企业，是国内企业联系日本市场和日本企业的窗口。比如华为、方正、东软、阿尔派、北大青鸟等在日本都有子公司或关联公司。

日本华人IT企业的经营业务涉及面广，但成为主业的主要有以下的几种。第一是承接日本企业的外包，或为日本企业提供服务，如软件开发、系统开发和系统维护、通信服务等，即所谓BPO（Business Process Outsourcing，商务过程外包）。第二是连接日本和中国的业务，如将日本企业的软件开发、业务处理等外包业务转包给国内企业，或在国内成立软件公司直接承接日本企业的外包业务，或是从中国国内招聘技术人才再派遣到日本企业从事软件开发和系统维护等工作。第三是独立开发销售软件系统、硬件产品等。另外，最近也有不少华人IT企业从事跨境电商和移动支付的业务。

日本华人IT企业虽然发展迅速，但也存在一些问题。比如，尽管有一些已经发展起来的大企业，有其独特的产品和服务，但大部分华人IT企业规模不大，业务也只局限于外包和人才派遣，有的只是做第二轮第三轮的分包和转包业务。

还有，大部分的华人IT企业依附于日本企业的外包，容易受日本企业业绩的影响。因此，自主开发产品，提供独特的无可替代的服务，就是许多华人IT企业的努力方向。

日本华人IT企业今后的发展面临3个机会。一是大数据、人工智能等新技术新产业的发展。二是中国的发展和人工费上涨会出现外包服务的逆向变化，即中国企业向日本企业发包软件、系统等开发业务。三是跨境电商的发展。可以期待日本华人IT企业抓住这些机会，将会继续发展。

4、在日华商的新动向

这20年中在日华商已经获得了巨大的发展，近几年的发展有以下的新动向。

第一，在日华商大型化、正规化。

日本华商创办的企业中小企业居多，也出现了不少大企业，或者说不少中小企业已经发展成为大企业了。有的企业在日本雇用的员工人数超过5000人，员工人数上千的华人企业不是少数。

企业上市是成功的标志之一。日本华人创办的企业在日本证券市场的主板和创业板上市的至少有十多家。华人企业收购、参股控股的日本上市公司估计也有十来家。

第二，与来日发展的国内企业加强合作。

除了在日华人积极创业，经营企业外，中国国内的企业也走进日本，在日本开展各种业务。中国的知名企业，如海尔、联想、华为、阿里巴巴等都在日本设立了分公司，在日本开拓市场、或采购商品和所需的零部件。

中国企业在日本开展业务，得到了在日华人企业的很多帮助与配合。如华人企业与来日发展的

国内企业创办合资公司共同开拓在日本的业务。国内的企业和投资基金在日本收购了十余家日本的上市公司，也有在日华商参与出资参股。

第三，华人商会的工作拓展。

日本的华人商界的代表是早在1999年就成立了的日本中华总商会，这20年来会员企业不断增加，不仅有在日本创业的华商企业，还有中资企业、日本企业和外资企业。随着总商会的发展壮大，总商会的组织结构和运营方式也逐渐正规化。总商会已登记注册成为法人，同时发展成为团体会员的联合体。作为中华总商会的成员团体，既有日本不同地方的华人商会，也有按华商出身地省市成立的商会，形成了华人商会的网络。

华人商会还发挥自身的优势，加强了与国内的合作。比如，中华总商会与黑龙江、特别是与佳木斯市建立了全面的经贸合作关系。来自江苏、上海、浙江、安徽四地的华商商会发挥与长江三角洲联系密切的优势，成立了“日本中国长江三角洲一体化促进会”以及“日本中国一带一路研究院”，以促进和帮助日本企业参与长三角一体化和一带一路建设。

第四，华商积极参与公益事业。

华商积极参与和资助在日华人社会的各项活动。比如春节、国庆的庆祝活动，文化艺术活动等都有华商的捐款赞助，商会参与组织实施。2019年和2020年的春节，东京电视塔和天空树连续两年点亮中国红，都得益于华商的捐助和商会的运作。还有，一些成功的华商向在中国学习的母校和在日本留学的母校捐款建设研究设施或建立奖学金。

如上所述，这20年来日本的华商获得了很大的发展，相信再过20年必定会有更大的发展。

东盟华商的发展与日本



□ 作者：王效平
日本北九州市立大学工商管理
研究生院教授
中华商务研究中心主任

1979年考入中国人民大学工业经济系，后留学日本国立九州大学主攻管理会计学，1990年获经济学博士学位。1992年日本北九州大学经济学部副教授，2000年升任教授，经营信息系主任，2011—2017年任工商管理研究生院院长，自2014年兼任中华商务研究中心主任至今。1995—1996年曾在加州大学·克莱校做访问学人。

海外华人最集中的地区是ASEAN，华人企业带动了该地区的经济增长，也从其经济增长中受益匪浅。进入21世纪后，以华人资本为媒介的东亚区域内贸易、直接投资额续增，中国加入WTO后在扩大国内市场开放的同时，以此为契机加大其参与经济全球化的步伐，为海外华商提供了更宽广的发展空间，强化了彼此之间的互动。在这里，我们以华人企业为对象，就居住地区经济中的绝对存在感、在全球化经济交流中所发挥的作用以及其独特的经营方式进行简要介绍。

1、落地生根的东南亚华人

以中国为祖先移居世界的海外华人有6000多万，其中约7成集中在东亚地区。鉴于历史上遗留的敏感民族问题，东南亚各国概不公布经济、产业、企业的分族裔统计指标，10数年前据推测华商的总资产规模已超过3兆美元，华商在各主要聚居国上市企业数中始终超过大半，显示华人对居住国国民经济的贡献度远超过其人口比例。

在海外华人主要移民地印度尼西亚，二战后从殖民地统治独立不久采取了土著民优待政策，在文化层面强制推进对移民的同化，禁止中文教育乃至传统文化活动；在产业经济领域，引进行业牌照发放和交纳保证金等制度，华人被当作外来者传统行业被排挤，华商需向土族转让所有权（采与土族合资经营模式）。马来西

亚也以消灭贫困、消除经济功能分化为名推进土著民优先政策，强制对非土族法人所有权的再分配，设定面向土著民的职业和招聘配额框架等，大大约束了华人企业的正常经营。

独立后的东南亚各国身受东西方冷战的影响，东盟（ASEAN）则作为反共反社会主义同盟应运而生，早期移居的华侨华人的忠诚心被质疑，“华侨·华人问题”则成为阻碍居住国和新中国关系发展的障碍。始于1979年的改革开放政策的实施成为中国改善与东盟关系的转折点，印尼于1988年恢复对中邦交，新加坡于1990年与中建交，东盟还积极接纳印度支那社会主义国家加盟，国际政治环境得以改善，推动出口导向工业化积极招商引资的东盟各国认识到华商作为外资合作伙伴的价值，着力于国内族裔融合的同时，积极主导东亚区域贸易自由化和经济一体化交流。因为他们的忠诚心始终被质疑，正常的国际商业投资往往被猜测为“资金外逃”，上述内外环境的大幅度改善促使华人资本的投资行动趋于积极和大胆（而真正的转机恐怕应该是印尼苏哈托政权倒台，新政权废除对华人的歧视制度而公布《新国籍法》，作为最大的海外华人聚居国的印尼在东盟创始国中作为最后接办“世界华商大会”极具象征意义）。

2、蜕变为世界级跨国公司的东亚华商

在东南亚地区，海外华人资

图表 1 全球华商 1000 大排行榜入围企业的分布

国家·地域名	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
印尼	8	9	12	11	8	7	7	10
新加坡	23	26	28	25	11	10	12	13
泰国	5	6	8	9	8	6	7	7
马来西亚	19	24	21	19	12	13	12	12
菲律宾	9	8	8	8	8	8	8	8
东盟 5 国合计数	64	73	77	72	47	44	46	50
台湾	93	99	93	81	47	44	53	56
中国大陆	668	648	650	659	763	770	748	731
香港 / 澳门	132	136	136	141	98	94	94	98
中华 4 地合计数	893	883	879	881	908	908	895	885

出处：由笔者根据『亚洲周刊』（香港）特辑编制。

图表 2 全球华商 1000 大上榜企业的自有资本比率

国家地区名	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
印尼	45.5%	46.3%	41.1%	37.7%	38.2%	42.3%	43.2%	43.8%
新加坡	49.0%	53.0%	55.3%	53.8%	49.3%	47.9%	46.7%	47.6%
泰国	47.7%	49.4%	45.0%	41.6%	44.2%	39.9%	41.2%	37.7%
马来西亚	49.5%	52.5%	51.8%	50.3%	45.6%	46.4%	45.7%	47.9%
菲律宾	52.0%	46.4%	46.9%	47.8%	46.5%	42.6%	41.4%	39.9%
台湾	50.5%	48.4%	48.5%	47.1%	47.9%	50.1%	50.1%	49.1%
香港 / 澳门	50.7%	49.4%	51.5%	52.1%	50.4%	48.1%	46.2%	47.9%
中国大陆	47.7%	48.5%	46.4%	47.6%	47.5%	47.6%	46.2%	46.1%

本已摆脱了贸易批发·零售·餐饮，以及与日常生活用品相关的传统工商业等具移民背景的行业局限，进入大工业，基础设施与房地产开发，现代金融与科技行业，成为旅居国国民经济的核心参与者，自然成为投资在地跨国公司的主要合作伙伴。

所附图表为根据香港『亚洲周刊』“全球华商 1000 大排行”所整理的资料，1994 年该刊物曾以表中东盟五国和港澳台华商为对象持续做了 13 年“国际华商 500 大排行”，自 2007 年追加中国大陆企业改为现在的“1000 大

排行”（以上市公司市值为标准）。该变更顺应了 Fortune, Forbes, BusinessWeek 几大权威国际商业期刊相继将中国大陆企业纳入其国际大企业排行评价（随中国加入 WTO，市场化改革得以深化，中国企业更积极地参与国际商务，遂成为西方企业所关注的竞争与合作对象）。

该排行榜显示，为海外华人主要聚居地的东盟五国集结有国际华商的主要企业，近年入榜数有所减少，仍持续有 50—70 多家入围（本表扣除了位于排行榜高位的东盟 10 来家银行），新加坡

与马来西亚企业各双倍于其他三国；华商企业皆为所在国各行业的顶尖级企业，除市值外，营销额，总资产，股东权益（自有资本），纯利润等入榜企业合计值在其所属国股票市场均占绝大比例。随中国经济的持续发展，大陆企业的比较优势得到显现，在入榜企业数中的占比稳定上升，已占全体数的四分之三。东盟上榜企业的平均市值受世界经济和国际金融市场动荡和调整的影响有所升降，包括新加坡相对都低于中国大陆和港澳台企业，显示中华区股市市值得益于中国大陆经济成

长和实力上升的影响。

从该排行榜推算出的平均自有资本比率能确认到东亚区域华商财务结构的相对保守。东盟华商没幸免于1997—98年亚洲金融危机带来的重创，相较于南韩财团和聚居地东盟地土族资本，华商保守稳健的财务结构阻止了其陷入大面积破产。该指标在金融危机爆发后国际华商排行榜中曾持续数年达到刮目的高位，随东亚各国推动改革短期内摆脱了经济危机的影响，中国大陆加入WTO深化改革开放带来的商机，东亚华商的融资和营商环境获得改观，排行榜入围华商的该指标逐渐趋低。

3、探索多元平衡的东亚经营管理模式，促区域内实现共赢

进入本世纪以来，涵盖东盟、“四小”与中华经济圈的东亚地区已占日本对外直接投资的70%以上，对外贸易额的约60%，而直接投资与贸易的合作伙伴也基本都是该地区华人资本为主，近数年猛增的日本访客80%以上也来自于该地区（以中华圈与南韩为主）。自近10年来中日关系出现波折，日资企业采取China+One策略回避对中国大陆的过度投资依赖，转向东南亚地区寻找替代伙伴，而该地区华商则自然成为其商务合作对象。日资企业长期以来耕耘东亚市场与在地华商资本已有千丝万缕的接触，由于语言和文化隔阂、媒体的不作为等带来的信息不对称，往往对已深深植根于居住国成长为各行业支柱的华商欠缺客观认知。

日本社会对华商或中华圈企业并购日资企业或参与其经营尚没有坦怀接纳的心里准备。如几年前鸿海并购夏普引起媒体的轰动和关注却未被正面解读；泰国正大集团与伊藤忠商事联手对

中信集团构建资本联盟也并没被媒体和市场给予更积极善意的评价；华为积极投资日本市场、拓展和维护与日资制造商、通讯商共同构建产业·所做的努力就近虽被曝光，其意义尚未得到客观认知……虽同属于儒教文化圈（或汉字文化圈），日中韩企业之间商务合作中存在颇多深层的价值碰撞和文化冲突。

皮特·杜拉革曾对东亚经济发展中日本企业与华人企业的成长给予关注，1996年曾留下颇具启示意义的评价：“日本企业的成功得益于将企业管理如家，而华人企业的成功则源于将家族与企业运营一体化”。不难发现日本企业的治理机制，其终身雇佣与重年资的业绩评价制度明显出现松动，而海外华人的家族式经营却仍具有相当的生命力。笔者致力于比较管理学研究，20数年来持续访谈海外华人企业家，对日资企业与海外华人企业，中华圈企业之间如何超越所存在差异，增强互信和理解、共建双赢关系颇为关注，就近参与对日本百年企业管理模式的调研更激起对这方面的兴致。

儒家文化重血脉的家族传承广泛表现于海外特别是东南亚华商的公司治理机制中；具集权色彩的家长制则形成了由高层“速断速决”的战略决策模式；财务结构稳健保守则为减少来自于银行等外部机构对经营的干涉，以保持其经营安全性；广为流传的“三缘网络”（重人脉）则会增强交易的信用度和弹性，利于商业信息的搜集传递，具有减少市场交易成本的效果。华人于居住国打拼除父祖地的方言外，他们广泛接触多种文化，通常能操用多种语言，确是能承担跨国商业交易的天才。

随前世纪90年代初日本泡沫经济崩溃而进入所谓“失去了的20年，30年”低迷期，东亚各国

对风靡一时的“日本式企业管理”已不再给予充分关注和评价，但笔者通过近数年的实地调查研究，认识到还有另类的日本式管理蕴藏于众多百年企业（日本俗称“老铺企业”）中。^①日本是世界上“百年企业”最多的国家，而这些企业大都具有重视传统和事业传承的“家族”色彩，非血缘至上的传承机制则是维持可持续的秘诀之一。^②“百年企业”大都不执着于规模扩张，不善于张扬，故被蒙上一层神秘面纱，没有受到管理学界的重视。随1990年代初经济泡沫崩溃后日本上市大公司职业经理人背德行为被屡屡曝光，探析其“百年企业”兴衰和管理模式应具特别意义。^③在日本帝国数据库支援下敝中华商务研究中心与中山大学中国家族企业研究中心的“百年企业合作调研”进入佳境，相信探索多元平衡的东亚经营管理模式，对促进和推动区域经济和产业合作发展将会产生积极效用。

日本奉行资本自由化，但对外直接投资和对内直接投资（引进外资）实际值之间持续表现出极端的失衡，长期以来“引资”效果不彰，究其原因除欠缺招商引资的有效政策和激励机制之外，往往嵌入其日本企业管理模式中的独特商业文化·内外有别的保守的交易习惯，亦成为外资进入日本市场的障碍。认识此现状敞开心胸构筑与华商等东亚资本的默契融洽的合作关系，促进与亚洲经济更积极更深度的融合将左右日本产业经济今后是否可持续发展；同样虚心坦诚学习日本的精益制造、环保·大健康产业发展的经验与尖端科技无疑会促进华商聚居的东亚区域大幅扩展和提升其经济发展空间、提高产业附加值。由衷期待日本产业界和华商充分认识上述差异与隔阂，实现双赢。

图文纪事



1999 年

- 1999.09.09 日本中华总商会成立大会。
- 1999.10.06 组团参加在澳大利亚墨尔本举行的第五届世界华商大会。
- 1999.10.14 举办第一次商务讲座。并举办成立纪念酒会。陈健大使到场祝贺。



2000 年

- 2000.03.21 举办第一届华人创业经验交流会。
- 2000.03.29 吕行雄会长携理事一行出访香港、泰国、新加坡等地，拜访了当地中华总商会。
- 2000.10.24 举办“第六届世界华商大会”宣传说明会。
- 2000.11.05 吕行雄会长率商会会员参加“香港中华总商会成立 100 周年”纪念活动。



2001 年

- 2001.07.13 与唐闻生为团长的中国侨联访日团一行举行交流会。
- 2001.09.05 日本中华总商会会刊创刊号发行。
- 2001.09.13 与菲律宾华联总会签署“日本中华总商会与菲律宾华联总会理解备忘录”，并在菲律宾总统阿纽约的亲自见证出席下，交换了“理解备忘录”正式文本。
- 2001.09.15 以吕行雄为团长的日本中华总商会代表团一行参加在南京举办的第六届世界华商大会。在大会期间，成功举办了300多位来自世界各国和地区以及中国各地商界人士参加的“东瀛之夜”晚会。
- 2001.12.22 召开会员年度大会，通过了由严浩接任会长的理事会决议。



2002 年

- 2002.03.19 与东京大学中国留学生学友会举行联欢活动，开创了商·学·研交流的新路。
- 2002.04.21 以严浩为团长的日本中华总商会访问团一行25人访问了北京、上海。受到了国务院侨办郭东坡主任，人大华侨委副主任李道豫，全国政协港澳侨台办朱训副主任，全国工商联副主席黄孟复，全国海外联谊会田鹤年副会长等人的亲切接见。
- 2002.06.24 严浩团长一行访问了新加坡、泰国、香港。为争取赢得第八届世界华商大会日本举办权作宣传。
- 2002.11.23 与东京大学中国留学生学友会共同建立了创业论坛。

2003 年

- 2003.03.29 召开会员总会，选举出新一届理事会。颜安任新一届会长。
- 2003.05.25 举行大型抗 SARS 募捐音乐会，共捐得 650 万日元，通过我驻日大使馆捐赠给中国政府，支援祖国人民抗击 SARS。
- 2003.07.27 组织商会会员 42 人参加在马来西亚首都吉隆坡举行的第七届世界华商大会。
- 2003.09.06 全国人大吴邦国委员长访日之际，严浩会长代表总商会参加会见。
- 2003.09.21 协助成立日本新华侨华人会。



2004 年

- 2004.05.01 与福岛县政府合作展开中国上市企业赴日投资意识调查。
- 2004.05.09 举办首届在日华人高尔夫球友谊赛。
- 2004.06.25 举办首届华人经营管理者培训班（MTP）。共有 21 位华人社长或公司管理人员参加了为期 3 天的培训。
-]2004.11.12 举办中国民营企业家大型演讲会暨晚餐交流会。



2005 年

- 2005.04.13 参加香港中华总商会成立 105 周年纪念活动。
- 2005.10.09 与横滨华侨总会、神户华侨总会一起组成 117 人代表团参加在韩国首尔举办的第八届世界华商大会。



2006 年

- 2006.03.01 召开 2006 年度会员总会，选举产生了第三届理事会成员。黄耀庭担任会长。
- 2006.04.18 召开理事会，决定了正副会长的任务分工，及第九届世界华商大会组委会主席、副主席人选。
- 2006.10.21 黄耀庭会长率代表团参加新加坡中华总商会成立 100 周年庆典。
- 2006.11.09 在横滨举办 2007 日本中华年揭幕音乐会。



2007 年

- 2007.04.03 召开 2007 年度会员总会。明确 2007 年的工作目标为全力办好第九届世界华商大会。
- 2007.07.22 黄耀庭会长率团参加马来西亚中华工商联合会成立 60 周年庆典活动。
- 2007.09.15 第九届世界华商大会在神户和大阪成功召开，共有 30 多个国家和地区的 3600 多名华商代表参加本次盛会。



2008年

- 2008.05.08 为欢迎胡锦涛主席访日，与日本友好团体共同举办大型欢迎宴会。
- 2008.05.30 为四川汶川地震募集善款1300万日元，通过驻日大使馆转交灾区。



2009 年

- 2009.03.06 召开会员大会。选举出第四届理事会成员，严浩再次被选举为会长。当天还同时举办了“2009 春季经济研讨会”，由著名学者朱炎和松本大担任讲师。
- 2009.03.31 为欢迎中央政治局常委李长春访问日本，与日中友好团体及华侨团体共同举办大型欢迎宴会。
- 2009.06.13 召开临时会员大会，修改了章程，并推选了 8 名常务理事。当天还举办“2009 夏季经济研讨会”，当晚欣赏了著名相声艺术家姜昆领衔的中国曲艺家代表团为我商会举办专场演出。会员及家属 500 余人参加。
- 2009.08.10 严浩会长任团长，率团 40 人历时六天出访北京市和吉林省等地考察，先后得到全国人大华侨委陈玉杰主任、国侨办许又声副主任、中华海外联谊会黄跃金副会长、全国青联卢雍政府主任、全国工商联谢经荣副主席、吉林省政府竺延风常务副省长的接见。从此，商会每年夏季视察活动定期化。
- 2009.11.04 为迎接广东省委书记汪洋率领的广东省代表团访问日本，商会联合其他华侨团体，主办盛大欢迎晚宴。
- 2009.11.19 第十届世界华商大会在菲律宾首都马尼拉盛大开幕。我商会组团 66 人参加，为本届大会第 2 大海外代表团。
- 2009.12.15 为欢迎习近平副主席访问日本，商会与日中友好团体及华侨团体共同举办大型欢迎宴会。



2010年

- 2010.2.22 中国政府派遣“文化中国 四海同春”艺术团来日本公演，总商会与东京华侨总会主办了东京的演出，本会会员及相关企业人士约500人参加。
- 2010.4.22 本会与NPO法人ISL共同举办了“日本战略型经营干部中国研修团”访问活动，先后访问了上海市和江苏省，本会理监事为中心的10人参加了该活动。本活动每年定期举办，延续多年。
- 2010.5.18 在赤坂王子大饭店隆重举办商会成立10周年纪念酒会。
- 2010.5.30 温家宝总理访日之际，作为日中友好7团体、华侨华人4团体之一，举行了共同的欢迎宴会。



2011 年

- 2011.03. 311 地震后，总商会理事会召开紧急会议，向会员发出倡议书，号召会员为灾区捐资、捐物。3月12日，在程永华大使的带领下，中华总商会与旅日华人各侨团一起拜访了外务省，向日本的重灾区捐献了第一笔捐款。3月未经广东省侨办牵线，从深圳紧急调配200台手摇发电机，寄赠给相马市、久慈市、新地町等重灾区。
- 2011.04.20 总商会组织会员中从事餐饮企业前往气仙沼市支援灾区，现场做出2400人份什锦炒饭和粟米汤。另外，还赠送1500份食品。7.2 总商会再次前往官城县南三陆町进行支援灾区炊事活动，现场做出1200人份什锦炒饭和粟米汤。
- 2011.10.6 第十一届世界华商大会在新加坡开幕，商会派出了以会长严浩为首的74名会员出席。大会结束后，代表团还与马来西亚中国企业协会进行交流。



2012年

- 2012.2.26 为了树立新形象，事務局乔迁新居，地址位于东京都有乐町电气大厦。3.16 在东京会馆举行2012年会员大会暨恳谈会，129名会员出席。正式宣布商会转型为社团法人。
- 2012.4.2 成立新体制理事会，日本中华总商会实现法人化（一般社团法人日本中华总商会成立）。
- 2012.7.29 商会首次单独选派13名会员子女参加国侨办举办的“海外华裔青少年寻根之旅”夏令营活动。
- 2012.09.07-09 为纪念中日邦交正常化四十周年，与主要华侨团体共同举办为期三天的“2012东京中国文化节”。
- 2012.09.14-15 为纪念中日邦交正常化四十周年，举办中日经济论坛和“华商杯”高尔夫邀请赛系列活动。
- 2012.12.03 在北京成立“CCCJ北京联谊会”。



2013 年

- 2013.2.20 本会派代表团出席澳门中华总商会成立 100 周年庆典。
- 2013.4 本会向四川雅安地震捐赠一百万日元。
- 2013.6.27 关西分会成立祝贺会隆重举行，关西政界、经济界 130 多名嘉宾出席了大会。
- 2013.9.24 ~ 26 第十二届世界华商大会在成都盛大召开，我会派出 70 活动余人的大型代表团参会。



2014年

- 2014.1.22 本会首创在日华人团体与日本经济界定期新年联谊活动迎春会。
- 2014.6.13 设立 CCCJ 上海联谊会，并于中国上海举办隆重成立大会。
- 2014.7.26 本会隆重举办成立 15 周年庆祝晚宴，邀请世界各地华商团体共贺。期间受世界华商大会召集人组织委托，承办第 3 次世界华商大会顾问委员会会议，并首创两年一度的“华商经济论坛”，本会主办第三次世界华商大会顾问委员会会议。



2015 年

- 2015.02.25 于 EPS 控股公司举办“2015 年第 1 次企业视察研修会”。
- 2015.06.24 于华为技术日本株式会社举办“2015 年第 3 次企业视察研修会”。
- 2015.08.20 ~ 21 赴北海道举办商务视察交流会。
- 2015.09.25 ~ 27 日本中华总商会组织 55 名会员参加于印尼巴厘岛召开的第 13 届世界华商大会。
- 2015.10.07 于 Laox 株式会社举办“2015 年第 4 次企业视察研修会”。
- 2015.12.03 关西中华总商会举办“2015 关西华商之夜”。



2016 年

- 2016.04.15 于海尔集团公司举办第二回产业视察研修会。
- 2016.05.28 ~ 30 日本中华总商会参加了在马来西亚举办的，马来西亚中华总商会成立 95 周年纪念活动，并参加第五回世界华商大会和顾问委员会会议。
- 2016.07.01 于日本航空公司举办第三回产业视察研修会。
- 2016.09.15 在纲町三井俱乐部举办中秋赏月会，开创慈善募捐新体制。
- 2016.09.22-23 参与新加坡中华总商会成立 110 周年纪念活动。
- 2016.10.31 于日本九州的 TOYOTA 工厂举办视察研修会。
- 2016.11.30 盛大举办第二回华商经济论坛。



2017 年

- 2017.02.13 组团参加由香港中华总商会主办的“区域合作与全球化经济展望”经济论坛，严浩会长参加论坛演讲。
- 2017.06.06 ~ 09 日本中华总商会每年一次的中国视察访问活动，今年与日本徽商协会共同组团，前往安徽省进行实地视察。
- 2017.09.16 ~ 17 日本中华总商会组织 60 余人代表团前往缅甸仰光参加“第十四届世界华商大会”。
- 2017.12.05 于池袋举办第一次“百人共同忘年会”。



2018 年

2018.03.16 在东京椿山庄酒店举办2018年会员大会。选举产生新一届理事会和执行理事会成员。

2018.06.10 ~ 16 严浩会长率团，与黑龙江总商会共同访问考察北京市和黑龙江省。

2018.07.18 本会特别赞助，由东京之星银行(The Tokyo Star Bank, Limited)主办的“2018 外国人创业者商务竞赛”在东京举办。本会严浩会长，徐志敏常务副会长，尚捷常务副会长出任评委，并由严浩会长颁发日本中华总商会奖。

2018.09.07 中国致公党副主席闫小培率团一行5人来访本会。

2018.10.04 ~ 06 严浩会长率团一行4人参加在韩国釜山举办的“世界华商大会第7次顾问委员会会议”。

2018.10.24 由本会主办、日中经济协会作后援的“第三届华商经济论坛”在东京虎之门 Hills 隆重举行。

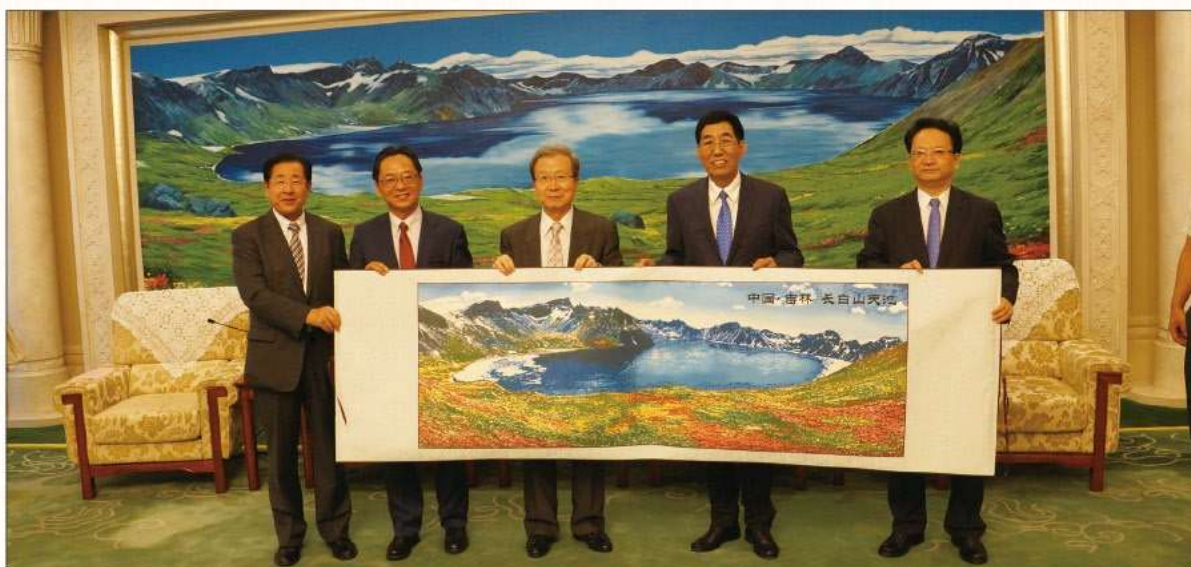
此外，作为定例活动，还分别举办了5次商务交流午餐会，2次产业视察研修会，考察了谷歌等企业。



2019 年

- 2020.1.7 总商会新年伊始搬迁到涩谷区惠比寿，在 7 日开始正式开门办公。
- 2020.6.14 由新潟分会举办“新潟华商论坛”，严浩会长，萧敬如理事长分别登坛。
- 2020.8.13-8.17 与日本吉林总商会，日本北京总商会共同组团回国考察。
- 2020.9.22 本会与全日本华侨华人联合会”、日本华侨华人联合总会”、在日中国企业协会等共同举办题为《礼敬共和国》的国庆 70 周年庆典晚会。
- 2020.10.21-24 本会组成 70 余人代表团，由严浩会长任团长，参加在伦敦举办的“第十五届世界华商大会”。

此外，作为定例活动，还分别举办了 8 次商务交流午餐会，3 次产业视察研修会，2 次研讨会。



2020 年

- 1.17 在东京帝国饭店宴会厅隆重举行 2020 年迎春会。
- 2.26 总商会首批募集的支援抗疫捐款 100 万日元，通过中国驻日使馆捐赠给中国红十字协会。
- 3.31 受新冠疫情影响，总商会采用书面决议的方式召开会员大会，选出第六届总商会法定理事会和执行理事会人选。

受疫情蔓延的影响，总商会的各项活动均改成网上在线活动。面向会员的活动，都按照既定计划稳步实施。共举办 6 次例会，3 次讲座，还各举办了一次商务交流会和企业视察。



支援疫情活动



网上会议

Chinese chamber of commerce in Japan

欢迎加盟
日本中华总商会
welcome

